慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	デイヴィッド・ヒュームという名の劇場 : 『人間知性研究』の文学的読解
Sub Title	David Hume's philosophical spectacle : the first Enquiry in eighteenth-century literature
Author	若澤, 佑典(Wakazawa, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.77 (2023. 3) ,p.143- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20230331-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

デイヴィッド・ヒュームという名の劇場
――『人間知性研究』の文学的読解

若　澤　佑　典

1. 序論――18 世紀英文学の中にヒュームあり

まず最初に，「18 世紀英文学の中にヒュームあり」と言ってみたい。デイヴィッド・ヒューム（1711 年～ 1776 年）は，スコットランド啓蒙を代表する文人であり，『人間本性論』や『イングランド史』といった著作によって，後代に名を残した。哲学／哲学史を学ぼうとする現代読者にとっては，懐疑主義の探究者として，情念論を展開する道徳哲学者として，論争的な無神論者として，あるいは「人間の学」を構想する社会科学の先駆者として，おなじみの名前である。時には，経済学の父アダム・スミスの親友，といった交友関係が言及されることもある。18 世紀のイギリスを論じる際，ヒュームの重要性について，全面的に否定するものは稀であろう。18 世紀イギリス思想の中で，ヒュームはどっしりと鎮座している。

ここで，18 世紀イギリス「思想」を「文学」に置き換えると，不思議な異化作用が生まれる。ヒュームは「18 世紀英文学」の中にいるのだろうか。もし，いるのであれば，その位置はどこなのか。ど真ん中，と即座に断言するのは難しい。そもそも彼は，小説や詩を書いていない。他方で，

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

無関係と言い切るのも，いかがなものか。18 世紀英文学は，エッセイをはじめとする多彩な散文ジャンルによって，一般的にイメージされる「文学」を越えた広がりを持つ。大学で職を得られず，文筆家として生きたヒュームは，間違いなく「文の世界」の住人であった。現状の 18 世紀研究／英文学史において，上記の問いに関する明確なコンセンサスはない。

18 世紀英文学の研究者たちは，散発的な形でヒュームに言及し，自らのナラティヴへと組み込んでいる。一方でヒュームのみを扱った文学研究書，あるいは大部にわたっての考察は，きわめて稀である。他方で，別の 18 世紀人を論じる場において，あるいは研究枠組みの構築において，ヒュームの名前がピョッコリ登場するのは，決して稀ではない。例えば，サラ・カリームの 18 世紀フィクション論は，ヒューム哲学からの示唆を語りだす。『18 世紀フィクションと驚きの再創造』（2014 年）序文において，彼女は自身のリサーチ構想が，ヒューム『人間知性研究』に触発されたものであることを，冒頭で紹介している（vii）。『人間知性研究』における因果性の検討において，日常生活の前提は動揺する。彼の懐疑主義的議論は，日々の風景を見慣れないものへと，なじみのない新奇なものへと変貌させる。ヒューム哲学の読者は，この「認識論的な危機」において，「驚き」を体験しているのである（30）。こうした，「日常性」（ordinary）の中から「驚くべきもの」（extraordinary）を取り出すプロセスは，18 世紀のフィクションが読者を「心地よい驚き」（pleasing wonder）に導く過程と，軌を一にしている（31）。ヒュームの存在はカリームにとって，18 世紀文学と思想が交差するポイントなのである。

カリームの論点を敷衍すると，文筆家ヒュームの書きぶり，筆力の核心が見えてくる。書き手としてのヒュームは，絶妙な，そして巧みなストーリー・テラーなのである。彼の哲学書を繙く時，読者はその論理的帰結に納得するだけでなく，その語り口に惹き付けられる。読者にとってなじみ深いもの，日常風景が哲学探究によって変貌し，見慣れぬ新奇なものとして語りなおされる。こうした語りの変換装置は，戸惑いや慄きといった反

応を喚起しつつも，読者をメロメロに魅了してしまうのである。カリームは，そのダイナミズムを解き明かす分析者であると同時に，自らもヒュームの筆力にノックアウトされた読者の一人である[1)]。認識論のラディカルな検討，すなわち知性の批判的探求は，その異化作用（＝読者が見ている世界の変換装置）を以って，パワフルな語りを生み出す契機になっている。

また，こうした筆の力は，偶発的に発生したものではない。『人間知性研究』を取り巻く出版状況，そしてヒュームの執筆意図を追っていくと，彼が慎重かつ意図的に，自らの語りを練り上げていった経緯がうかがえる。彼は『人間知性研究』の執筆において，哲学探究の成果をどう書き表すか，文章表現の在り方を模索している。本論に先立つ「読者への案内文」（Advertisement）が示すように，本書は『人間本性論』を鋳直したものであり，その焦点は主張内容の修正というより，いかにそれを伝えるかという「表現」（expression）の側に置かれている。体系的な議論構築を試行した『人間本性論』に対して，本書はエッセイの形式を採用し，各章は相互に連動しながらも，単独で読むことができ，一部を読み飛ばしても全体像がつかめるようデザインされている。第 11 章のみ，対話篇の形式になっていることも目を引く。

ダニエル・デフォーやサミュエル・ジョンソンといった「長い 18 世紀」イギリスの文人たちもまた，自身の文芸主題にフィットする表現形式を模索し，その実験から「小説」や「エッセイ」，あるいは「旅行記」といった文芸ジャンルが花開いている。もちろんヒュームその人は，小説家や詩人ではない。しかし，彼の書き手としての探求は，上述した 18 世紀英文学を代表する面々と，同じプログラムを有していると言える。文章表現にあれこれ試行錯誤するヒュームの姿は，「18 世紀英文学」という潮流の中で，彼が知的にジタバタしていることを示している。ここを出発点として，ヒュームを文学研究する可能性が開けてくる。

2. 研究の方法と対象――「声」の生成・分裂・結合

本論文は「巧みなストーリー・テラーとしてのヒューム」を論じるにあたって，彼の哲学散文を「文学テクストの解釈」手法で読み解く。すなわち，彼が語りの力に自覚的だった『人間知性研究』について，小説を読み解くようなスタイルで論じてみたい。これから見ていくように，当該書には読者に語りかけ，想像上の応答関係を取り結ぶ「わたし」が存在する。この一人称の語り手は，哲学的論証においてトリビアルな，平板で凡庸な存在に見えるが，一度取り上げてみると，実に複雑怪奇な構造を持っていることが分かる。『人間知性研究』において，読者を魅了し，説き伏せ，時に挑戦する「わたし」とはいったい誰で，その「声」はどんな特徴を持っているのか，英文学研究とイギリス思想を交差させて明らかにしていく[2)]。「わたし」はヒュームその人と連続しつつ，ヒュームそのものではない。このリアルとフィクション，現実世界と文芸の虚構世界を緩やかに移動する「わたし」，その特徴を抉り出すことで，文の人ヒュームの筆力を明らかにしていきたい。

この論稿では主として，『人間知性研究』の三つの箇所を読解する。第一に，語りの基本構造が設定される第 1 章，および知性探求の主要課題たる懐疑論が登場し，本書の全景が示される第 4 章を取り上げる。ここでは，懐疑論が哲学探究の一主題であることを超え，哲学そのものの在り方を形作る「メタ視点」が導入されるが，その渦中にあって，語る一人称の「わたし」も密やかに生成していることを示したい。『人間知性研究』では絶えず，哲学をどういった形で行い，どのようにその成果を共有するか，日常世界における哲学の営み，そして哲学者の位置が問われているが，その中で「哲学の語り方」もまた焦点化されていくのである。第 1 章で設定された「伏線」が第 4 章によって展開する様は，後の章を読み解く際にもカギとなる。

第二の読解箇所は，本書のまとめにあたる第 12 章である。知の分類と再構造化を踏まえ，朽ち果てた既存の知を破壊せよと叫ぶ，挑戦的な文言が並ぶ章である。語り手が知の革新を説く時，そこで前提となっている「わたし」あるいは「わたしたち」とは誰で，「わたし（たち）」に対置された「あいつ（たち）」とは，誰を指しているのか。語る「わたし」の生成とは，語り掛ける「あなた」の措定，そして「わたし」が挑みかかる相手といった，関係性の布置を含んでいる。この布置を見ていくと，「わたし」の領域，その内実が動いていることが分かる。この連続性を持ちつつ，変化拡張する「わたし」の内実に迫っていきたい。

第三の読解箇所は，当該書で異彩を放つ第 11 章である。この章は対話篇の形式で書かれており，他の章と連動しつつも独立性が高く，『人間知性研究』という書の異種混合性を際立たせるセクションとなっている。一人称の「わたし」は，読者への語り手を超えて，友人と対話を始める行為者となる。いわば哲学の論証プロセスで透明化していた語り手が，具体的な形を持って登場する箇所である。もっとも入り組んだ構造を持ったセクションであるため，本稿の最後に検討する。「エッセイの一部に含まれた対話篇」という第 11 章の性質は，『人間知性研究』の文学的読解を，ヒューム他作品との関わり，あるいは 18 世紀の文芸世界という場に位置づけていく際，有益な出発点となろう。この第三の読解を通じて，ミクロ的なテクスト分析を，マクロ的なコンテクスト解釈へと飛翔させていきたい。

本論稿はヒューム研究（あるいは広く 18 世紀研究）の枠内において，三つの知的潮流が交差するポイントである。第一の知的潮流として，ヒュームに関する伝記的研究が挙げられる。古典的なものとしては，E・C・モスナーの『デイヴィッド・ヒュームの生涯』（第 2 版：1980 年）があり，文の人ヒュームという像を確立させた。追って，ニコラス・フィリップソンの『デイヴィッド・ヒューム：歴史家としての哲学者』（1989 年，2011 年）が，彼の哲学探究を広い文化的・知的文脈に布置している。フィリップソンは，哲学することと歴史を書くこと，両者の相互作用からヒュームの著述行為

を解釈している。近年では，ジェームズ・A・ハリスによる『ヒューム：知的伝記』（2015 年）が記念碑的作品となっている。ハリスは哲学研究者として，ヒュームの生の軌跡そのものよりも，哲学に関わるアイディアの生成発展・変転を，伝記叙述のフォーカスとしている。ヒュームその人から，彼のアイディアの歴史的記述へ向かうハリスであるが，ハリス以後のヒューム研究者にとっては，人とアイディアの相互関係が更なる主題として現出している。

第二の知的潮流は，ヒュームにおける哲学のやり方，そのメタ視点を検討するものである。古典的なものとして，ドナルド・W・リヴィングストンの『哲学的メランコリーと狂乱：ヒュームによる哲学の病理学』（1998 年）がある。リヴィングストンは，ヒュームが「経験主義者」であるという一般的見解に挑戦し，彼の問題は知の基礎づけではなく，むしろ哲学を介していかに生きるか，という生の全体性に関わるものだ，と主張した。とりわけ，「偽なる哲学」（false philosophy）の批判的検討から，「真なる哲学」（true philosophy）が現出するプロセスに重きを置いている（Livingston xii）。類似の視点を持つものとして，ドン・ガレットの『ヒューム哲学における認知と参与』（1997 年）やアネット・バイヤーの『感情の歩み：ヒュームの「人間本性論」に関する省察』（1991 年）がある。近年の研究において，ヒューム哲学を生の全体性の中で考えたものとして，マーガレット・ワトキンス『ヒュームの「エッセイ」における哲学の歩み』（2019 年）が挙げられる。

第三の知的潮流として，英文学研究の枠組みでヒュームを扱ったものがある。カリームの『人間知性研究』読解で見たように，ヒュームだけを論じた英文学書は皆無であるが，他の作家たちと並置して，あるいは思想文化史・文芸史を語るための参照軸として，ヒュームに触れるものはいくつかある。カリーム以外に重要なものとして，エッセイをイギリス思想史の中に位置づけようとするティム・ミルンの『感覚の言明：ヒュームからハズリットにいたる経験論とエッセイ』（2019 年），会話の文芸史を構想する

ジョン・ミーの『会話の世界：文学・論争・コミュニティー　1762 年～1830 年』（2011 年），さらには知の分類と文芸ジャンルについて扱うクリフォード・シスキンの『システム：近代的知の形成』（2016 年）がある[3)]。ヒュームを誰と（どんなテクストと）並置するか，そこからどんな文芸世界を描くかは，各研究者の腕の見せ所だろう。一方で，フレッド・パーカーの『懐疑主義と文学』（2003 年）のように，ヒュームをポウプやジョンソンの世界へと投げ入れるものもある。他方で，ジョン・リチェッティの『フィロソフィカル・ライティング』（1983 年）のように，文学研究の中でヒュームを他の哲学者，ジョン・ロックやジョージ・バークリらと交差させ，（長い 18 世紀における）イギリス思想の文芸性・修辞性を抉り出すものもある。

3．読解その 1――哲学論証の背後にいる「わたし」

まずは，知性批判を語る／書くことのアイロニーから始めよう。ヒュームは『人間知性研究』に先立つ『人間本性論』で，自我が「異なる知覚の束，あるいは集合体“a bundle or collection of different perceptions”」に過ぎず，「絶えざる流動・運動のうちにある“in a perpetual flux and movement”」ことを論じていた（1.4.6：165）。一人称のわたし，すなわち「心とは劇場のようなものである“The mind is a kind of theatre”」と（1.4.6：165）。彼の知性批判を通じて，一人称のわたしという存在が，どっしりとした一枚岩なものから，絶えず変化を続ける断片の集まりへと，見方が変わってくる。

「心という劇場」という比喩は，人口に膾炙して現代でも耳にする，いわば名フレーズとなった。文の人ヒュームは，インパクトある言語表現を以って，統一的な自我像を破砕し，知の文芸世界に名を刻んだことになる。きわめて明瞭でハッキリとした，思想史の標準的記述である。しかし，このフラットなストーリーに対し，隠れた複雑さ，アイロニーを指摘したの

が，ジェローム・クリステンセン『啓蒙の実践：ヒュームと文芸キャリアの形成』(1987 年）だ。私たちヒューム作品の読者は，自我の破砕を哲学的に受け止めつつ，それを説明するヒュームその人の「社会的アイデンティティが一続きである」ことを自然に受け入れている（Christensen 3)。いわばコロンブスの卵といった指摘である。一人称のわたしを断片化する哲学ナラティヴについて，一般読者はそのストーリーを受け入れる一方で，それを語るヒュームその人について，断片性や流動性を感じない。彼のテクストを繙く時，ヒュームは常に一貫した，どっしりと存在する「一人のヒューム」である。書き手のヒュームと，読書を介した対峙をする際，その存在の不明瞭さやバラバラさを感じる読者は稀であろう。ヒュームの読者は「安心して懐疑することができる」(Christensen 3)。これがまさに，ヒュームが知性批判を書くことで起こる，アイロニーである。

ヒュームの哲学散文，その筆の巧みさを考える時，哲学論証を行う「わたし」，すなわち作品内のストーリー・テラーについて，吟味する必要がありそうだ。この語り手である「わたし」は，往々にして透明な存在だ。哲学の議論を追う読者にとっては，自明な存在であり，ナラティヴの背後（あるいは一部）にあって，焦点化されにくい対象である。文学研究の読みを適用することで，その実態と迷宮的奥行きが明らかとなるだろう。そもそも文学解釈において，作者と語り手は等価ではない。作者は虚構的な「わたし」を創造することで，演技性を持ってストーリーを語り始める。この区分を意識しつつ，『人間知性研究』を見ていくこととしよう。

知性探求という壮大な物語において，「わたし」は遅れてやってくる。当該書の第 1 章，「哲学の異なる種類について“Of the Different Species of Philosophy”」において，語り手は目立った形で登場しない。むしろ，ここでスポットライトを浴びるのは，三人称の「彼／彼ら」であり，それと対置される形で，一人称複数の「わたしたち」が現れる（5–6, 10, 12)。「彼／彼ら」とは，日常世界にあって思索にふける「哲学者」を指し，とりわけ，行為よりは理知に重きを置く「正確ではあるが深遠な“accurate

and abstruse”」哲学者たちの代名詞として使われている（5, 6）。こうした深遠な哲学の従事者たちは，（詩文の力を使って，人間本性の描写を彩り，市井の人々の心と支持をガッチリつかむ）「平易で敷居の低い“easy and obvious”」哲学者たちと対比され，さらにはこうした哲学者の一群が「人類の大半を占めるフツーの人々“the generality of mankind”」と対照され，複層的なレベルでの二項対立が，第 1 章で提示される。

哲学書たる『人間知性研究』の冒頭で，その語りが（思索にふける）哲学者たちを「三人称」で，すなわち他者化して描くのは巧みであり，アイロニーすら感じるところだ。知性探求を行うヒューム自身は，いわば深遠な哲学的主題に踏み出そうとする者であり，こうした哲学者の姿は自分そのもの，あるいは少なくとも仲間であり，他者ではないだろう。そうした自らの分身というべき者たちを，三人称の「彼／彼ら」で呼び，日常世界における弱々しさを描くのは冷静な観察，もっと言えば冷めた自嘲であろう。哲学者の二分類を進める中で，「（深遠な）哲学者が日陰を離れ，日のもとに現れたとき，その思索は消えてなくなる“the abstruse philosophy […] vanishes when the philosopher leaves the shade, and comes into open day”」とまで言っている（6）。深遠な思索は，閉じられた空間において一つの形をなすが，人々の行き交う市井にあっては影響力を持たないし，日常生活の中で思索を全うするのも難しい。日々の営みの中にある哲学すること，哲学者と市井の人々の関係性を，俯瞰的な視点から問うているのである。

ただし，冒頭における「深遠な哲学者たち」の他者化は，哲学探究に関する白旗ではない。むしろ，この苦しい現状を出発点として，いかに知性探求の思索を，一般の読者へとおもしろく，しかし正確に届けるかが模索されている。「愉快なもの」（entertainment）と「学び」（instruction）の協働は，『人間知性研究』が絶えず追い求めるものである（5）。第 1 章の最後に置かれるのは，未来への知的展望，期待のことばだ。「もし，わたしたちが，深遠な探求を明瞭さと両立させ，真理を目新しさと整合させることで，異

なった種類の哲学をめぐる境界を融合させられたら，それは喜ばしいことだろう“Happy, if we can unite the boundaries of the different species of philosophy, by reconciling profound enquiry with clearness, and truth with novelty!”」と希望が語られている（12）。ここで，主語が一人称複数の「わたしたち」になっていることに注意したい。哲学者たちを三人称で，すなわち，哲学と関わらない人々の目線から描いてきた第 1 章は，最後に人称の大転回をやってのけるのである。本来，これまでの文脈において，「わたしたち」とは哲学とは関係ない，市井の人々と紐づけられていた。二種類の哲学の融合において，その探求に従事する人たち，そのマリアージュを促す人々は，「彼ら」ではなく「わたしたち」になる。視点が一般読者から哲学者の側に移った，とも言えるし，そうした市井の人々をもアクターとして巻き込んで，統合された哲学が展開する，と結論付けることもできる。哲学から隔たった一般読者は，第 1 章冒頭の視点に自己同化し，どんどん読み進める中で，自らも哲学する人々の輪に投げ入れられる。この「彼ら」から「わたしたち」への大転回が，自然な形で，しかも見逃してしまいそうな密やかな流れで，巧みに行われている。二項対立の布置と融合，人称／視点の転回や「わたしたち」の領域変容は，今後の章を読み解く際にもキーとなる，基本構造である。

第 1 章において，人称（の巧みな使用）は読者を哲学的思索へと呼び込み，日常世界の中で哲学することを布置する，いわば俯瞰・分類・構造化の軸となっていた。他方で，冒頭では語り手の「わたし」，ヒュームらしき人は明示的には登場しない。ヒュームその人を感じる「わたし」が目立って登場するのは，懐疑論の具体的検討に入る第 4 章になる。「知性の働きに関する懐疑論的問題提起“Sceptical Doubts concerning the Operations of the Understanding”」と題された本章で，語り手は「この章において，私は簡単な課題解決を以って満足する（べき）だろう“I shall content myself, in this section, with an easy task”」などと述べる（29）。

小説の語り手が，読者へと出来事を次々提示していくように，この語り

手も読者に問いかけ，時には説得や論駁を行う。とりわけ，第４章で「経験から導かれる論証」について懐疑論的検討を行う際，語り手の「わたし」が前面に飛び出してくる。我々が経験をベースに何かを論証／推論する際，そこで前提となっているのは，過去に起こったことが，未来においても同じ形で発生するだろう，という「過去と未来の類似性“[the] resemblance of the past to the future”」である（32）。この類似性は，日常生活を営む上での大前提であるが，すべての場合に妥当性を持つわけでない。時に，見えない変化が進行し，昨日とは違った事態が，明日に起こることもあるのだから（32–33）。ここで，『人間本性論』の語り手は，この想定（＝目に見えない変化が起こり，過去の知見が未来に通用／適用できないこと）を以って，読者に直接訴えかける。

> どのような論理が，どのような論証過程が，この想定に反して諸君の立場を保護するのであろうか。わたしの実践がわたしの疑念を否認しているのではないか，と諸君はいうかもしれない。しかし諸君は，わたしの質問の意図を誤解しているのである。一行為者としてのわたしは，この点に関してまったく満足している。しかし一哲学者として，すなわち懐疑論とはいわないまでも若干の向探究心を分かち持つものとして，わたしはこの推理の基礎を学びたいと欲するのである。いかなる読書も，いかなる探求も，これまでのところこの難問を除去してくれることはできなかったし，あるいはこれほど重大な問題に関してわたしを満足させてくれることもできなかった。わたしにできる最善のことは，たとえなんらかの解決を得る希望をおそらくはほとんどもてないとしても，この難点を世間に呈示することだけではなかろうか。われわれはわれわれの知識を増大することはないとしても，少なくともこの手段によりわれわれの無知を感得することであろう。（邦訳 35：原文 33）[4)]

ここで登場する「わたし」とは，日常世界での所作を脇において，哲学的思索へと邁進する存在である。この彼は自らの探求が，自身の知的限界を超えるかもしれないこと，自らの力では解決できないやも，という一抹の意識を持って問いと格闘している。彼は好奇心に突き動かされ，自らの問いかけが一般の人々と共有されることを望み，学の発展に対する希望を捨てない。また，彼は既存の知に満足せず，渇望する者でもある。過去に行われた研究，過去の人々が著した書物では，彼を満足・納得させることはできないのだ。

引用した第 4 章の一節に見られるように，『人間知性研究』の語り手は，無色透明の「わたし」ではなく，固有の感情とふるまいを伴う，具体的な一個人として現出してくる。彼が「行為者」――日常世界を動き回る存在――という側面を持ちつつ，それをいったん保留し，哲学者として思索する様は，第 1 章の冒頭と対応している。第 1 章では人間存在の二つの側面――行為する存在と思索する存在――をベースに，二つの哲学の在り方が描出されていた。第 4 章において，語り手の「わたし」は，思索の世界で知的探求を行いつつ，その成果を，行為の世界の人々へと投げかけている。彼は具体的な一人の人間であると同時に，ヒュームのモデルを体現／受肉した存在でもある。

『人間知性研究』の語り手「わたし」は，多層的な背景を持って，読者の前に登場する。本書が哲学的論述の「かたまり／複合体」という点において，語り手は現実のヒュームその人であり，少なくとも両者は連続している。ただし，第 4 章での語り掛けで見られるように，語り手の「わたし」は，現実のヒュームから緩やかにスライドし，哲学的主張の形象となったり，一般的視点を具体化／個別化したものとして，ふるまい始めたりもする。いわばフィクション作品における作者（現実の世界の住人）と語り手（虚構の世界の住人）のあいだのような，連続的／断絶的な関係が，『人間知性研究』の中にも見られると言える。

4. 読解その 2——伸び縮みする「わたし」の領域

物語にはストーリーの波がある。冒頭で読者をアッと言わせ，フルスロットルで駆け抜ける物語もあれば，ゆっくりと出来事の全体像が姿を現し，ストーリーのビッグ・ウェーブが到来するまで，頁を要する物語もある。こうした語りの調子，テンポをめぐる特徴は，哲学散文にも適用できるだろう。冒頭でアッと驚く命題を提示する野心的な哲学書，行く先がハッキリせず，モゴモゴと各論を語る慎重な論考，巨大な哲学システムの構築を描き，足固めを進める体系的な書など，さまざまなタイプが発見できる。

もちろん，『人間知性研究』にも語りの波がある。最初の三章分は，いわば本題に入るための基礎固めであった。先の本文読解で見たように，第 1 章のメタ哲学論（＝哲学をどうやって行うか，その複数の方法）における二項対立とその融合は，第 4 章以降のナラティヴに対して，原型となるモチーフを提供している。第 1 章は予備考察でありつつ，文芸作品としての『人間知性研究』を隠れて規定する，いわば伏線である。こうした前振りを受けて，一人称の語り手「わたし」がクッキリ登場するのは，第 4 章であった。

『人間知性研究』におけるクライマックスは，最後に置かれた第 12 章であろう。最終章「アカデミー的あるいは懐疑的哲学について」は，ドラマチックな高揚感を伴って，これまでの知性探求を結ぶ。ヒュームが導き出すのは，既存の知的体系に対する「大破壊」（havoc）であり，「詭弁と迷妄しか含むことのない」書物たちを「炎に投ぜよ」という叫びが，文末に置かれている（123）。本章はこれまで行われてきた，哲学的議論のハイライトであると同時に，ヒュームが「わたし」という人称で形作ってきた，語りのクライマックスにもなっている。彼の探求は，「懐疑論」（scepticism）という体系的言説を検討しつつ，そのディスコースを実践する「懐疑論者」（the sceptics）という人々の姿を，生き生きと描き出している。懐

疑論者たちは，日常生活から遊離した存在で，日々の生活感覚に反した結論を提示する。最終章は，そんな「彼／彼ら」を語ること，すなわち三人称の記述が起爆剤となり，ヒュームの哲学的ナラティヴを深化，複層化させていく。

これまでの章では，哲学者の「わたし」が読者に呼びかける形で，さらには両者を包含する「私たち」が知の改良・増進を目指す，という語りのフレームによって，哲学の探求が進められてきた。最終章において懐疑論者（たち）が登場する際，その存在は「わたし」とも，読者の「あなた(たち)」とも違う，異邦人のような形で描かれる。少なくとも本書の語り手は，「私も懐疑論者だ」というような同一化は，基本的に行わない。哲学者の「わたし」，すなわち語り手にとっても，懐疑論者たちは自身と区別されうる「彼ら」，別のグループの人々であることがスタート地点に置かれている。

第 12 章の始まりにおいて，懐疑論者たちは日常感覚の転覆者として，スキャンダラスな形で登場する。ただし，その過激さを以って，懐疑論者の全てが棄却されるわけではない。本書が強調するのは，懐疑論が「もっと穏やかに」行使された時，毒抜きされた破壊性が「われわれの判断において，適切な不偏性を担保」する力へと変わり，哲学探究をさらに推し進めることである（112)。「わたしたち」とは区分される「彼ら」であった懐疑論者ではあるが，懐疑論の内的区分を通じて，その一部と「わたしたち」の距離は縮められていく。

この融合の一つの極致が，最終章の末尾，「大破壊」の宣言に見られる。ここで起きる／起こす転覆は，かつて懐疑論者の行いとして，遠くから眺められていたものの変奏である。

> もしどれかの書物，たとえば，神学あるいはスコラ形而上学の書物を手に取ったなら，こう尋ねてみよう。それは量や数に関するなんらかの抽象的推論を含んでいるか。否。それは事実の問題と存在に関する

> なんらかの実験的推論を含んでいるか。否。ならば，その書物を炎に投ぜよ。なぜなら，それは詭弁と幻想しか含むことができないのだから。（邦訳 154：原文 123）

書物を炎へ投げ入れるのは，いわば書き手と読み手が融合した，私たちである。これまでの章において，哲学者の「わたし」と読者（のあなたたち）が局所的に融合し，未来の知に向かって漸進する私たちという括りが形成された。その次の段階において，彼らとして登場した懐疑論者たちの行いが，緩和した形で私たちの中へと取り込まれる。ヒュームその人から出発した「わたし」は，二つの哲学像を経由して，日常生活の中で思索する哲学者の姿を形象化した。そんな一般性をもった「わたし」は，知性批判を推し進める中で，哲学探究を傍観していた一般の人々も，あるいは知性破壊を行う懐疑論者のうち，穏和な者たちをも自らのうちに取り込んで，哲学探究のプロジェクトを完遂する。この「わたし」の拡張が，『人間知性研究』における語りの到達点であり，「わたし」をめぐる物語のクライマックスと言えよう。

このクライマックスは，第 1 章において密やかに予告され，第 12 章の「大破壊」宣言で伏線回収へと向かっている。前セクションで見たように，哲学をするのが「彼ら」から「わたしたち」へと変容する人称の転回は，『人間知性研究』冒頭で試行されていた。本書最終章の結びも，第 1 章の基本構造をなぞったものである。知性探求の始まりは，語りにおいてその終着点をすでに規定・予告し，知性探求の結びは創造的反復において，始まりの構造を完結させる。この構造的な対応関係は，書き手のヒュームが哲学的議論の内容のみならず，その提示をめぐる配置関係，読者を魅了するための文章的仕掛け，語りの基本パターンとその変奏的記述をきわめて緻密に，計算して書いていたことを示唆するものだろう。第 1 章においては，「哲学者たれ，しかし哲学することの渦中にあって，依然として人間たれ“Be a philosopher; but, amidst all your philosophy, be still a man”」

という鮮烈なフレーズに，読者はノックアウトされシビレる（7）。第 12 章においては，「ならば（その書物を）炎に投ぜよ“Commit it then to the flames”」（123）という刺激的な一文に，読者は再び雷に打たれる。彼方からの呼びかけに始まり，書き手からの呼びかけに終わる。知性探求は，デザインされたことばのドラマ，語りの劇場を生んだのである。

5. 読解その 3――「わたし」の反転・交換

本論稿は，『人間知性研究』の結末を分析することで終わらない。第 12 章の大破壊から U ターンして，第 11 章の対話構造の分析へと移る。当該書の文学的読解が直線的に進まないのは，『人間知性研究』が持つ文芸作品としての構造，エッセイ集というジャンル的な特徴と関係している。ヒュームは知性探求の途上において，「アイディアの連合“the Association of Ideas”」について語り，研究上の基礎原理として採用している（17）。互いに異なったアイディアたちが，一定の結合原理の下で結びつき，一つの結合体を成すさまは，ヒューム哲学を下支えする基本的描像となっている。さらにアイディアの連合は，理論的なフレームであると同時に，彼の著述行為，あるいはその成果としての書物を特徴づける，形象としても機能している。『人間知性研究』の目次が示すように，本書は異種混合的なアイディアが緩く結びついた，アーギュメントたちの連合体である。こうした読みは，本書が「哲学エッセイ集“Philosophical Essays”」として構想執筆されたことからも，裏付けられる。エッセイという文芸ジャンルは，議論の寄り道や脱線など，単線的・収束的でない「おしゃべり」的な語りによって特徴づけられる。エッセイ，あるいはエッセイ集そのものが，いわば「アイディアの連合体」なのだ。

異種混合的な「アイディアの連合体」として『人間知性研究』を眺めた時，とりわけ異彩を放っているのが，対話篇となっている第 11 章だ。小説を書かないヒュームにとって，さらには小説ではない（が小説的な哲学散

文たる）『人間知性研究』において，もっとも物語性がハッキリした箇所となっている。第 11 章のオープニングでは，「わたし」が最近，「懐疑論的パラドックスを愛する友人」と会話した旨が記される（100）。すなわち，これから提示される文章は，その時のやり取りを「私ができる限り正確に思い出した」再現物であることが示される（100）。第 11 章の第一段落は，小説で言うところの「枠物語」のような機能を果たしていると言える。

「わたし」と「友人」は，哲学をとりまく社会状況，その歴史的文脈について会話を始める（100）。「わたし」は古代ギリシャにおける「意見や議論の自由な衝突“the free opposition of sentiments and argumentation”」を賛美する者であり，現代世界（= 18 世紀）における哲学の置かれた不運を嘆いている（100）。古代世界において，哲学者たちは無神論者であったとしても，その知的探求が社会的に脅かされることはなく，「平和と安寧」の中に生きることができた（100）。翻って現代の社会（= 18 世紀ヨーロッパ）において，哲学は「誹謗と迫害の嵐“harsh winds of calumny and persecution”」に怯えて日々を過ごしている（100）。「わたし」の語りの中で，「哲学」は擬人化されて「彼女“she”」と呼ばれていることにも留意したい。

この会話で扱われているトピックは，『人間知性研究』第 1 章の変奏であるようにも見える。第 1 章においては，哲学が日常世界で占める位置，哲学者とフツーの人々の交わりがテーマとなっていた。第 11 章においては，こうした主題に歴史的視点が導入され，「古代世界における哲学の位置×現代世界における哲学の位置」という対立軸が設定されている。哲学／哲学者の置かれた状況，その在り方について，二種類の立場を提示・衝突させる流れは継続していると言えよう。

第 11 章を見渡す限り，この「わたし」という存在がどのような人物なのか，想像する手がかりは乏しい。明示されているのは，彼の哲学的なスタンスのみである。「わたし」とヒュームその人とのつながりも茫漠としている。この対話篇が『人間知性研究』の一部を成しているという点で，

会話する「わたし」の背後には，ヒュームその人が控えていることは間違いない。懐疑論（者）に対して友好的に挑みつつ，その創造的批判性を包摂する「わたし」の手つきは，『人間知性研究』の第 4 章・第 5 章でヒュームが行っていたことと重なる。ただし，第 11 章で行われる対話において，「友人」は「わたし」に向かって「ねえ，ヒューム君」などとは呼びかけないし，「わたし」がイコール「ヒュームその人」と結びつくような構図を，間接的に避けているようにも見える。「友人」についても，やはり固有名は出てこないので，人となりについての具体的なイメージは乏しい。

こうした「わたし」という声の複層性は，ある一つの提案によって，さらに迷宮化していく。「わたし」は「友人」に対して，エピクロスに扮した演説をしてみないか，とけしかける（101）。エピクロスは無神論者であったが，古代ギリシャの自由な気風の中で，迫害を受けることもなく穏やかな生活を享受した。しかし，仮に，彼が公衆から政治的・道徳的糾弾を受けたとしたら，自身の立場をどう擁護しただろうか。「友人」はエピクロスを演じ，「わたし」は弁舌の聴衆たるアテネの市民，としてふるまう（101）。

この割り振り，すなわち「友人」がエピクロスをやり，「わたし」が聴衆に扮するという設定は，ストレートな対応ではない。エピクロスのふるまい，そして彼を厚遇した古代社会をたたえたのは「わたし」なのだから，本来であれば「わたし」がエピクロス役をやる方が，自然な流れではないだろうか。この仮想遊戯は，「わたし」と「友人」が，それぞれ自分の立場を反転させて，相手の位置にいたら自分は何を言うのか，演技を通じて実感するプロセスのように見える。

実際に，「エピクロス＝友人」の演説が終わったのち，「アテネ市民＝わたし」は以下のように声をかけている。

> わたしの見るところでは（とわたしは，彼が彼の演説を終えたのを知ってい

た），君は昔の民衆扇動家たちの術策を見逃していないようだ。また，君はわたしを民衆の代表者に仕立てて楽しみながら，君の知るように，わたしがこれまでつねに特別な愛着を寄せてきた原理を，君みずから抱いてわたしの立場に入り込もうと努力している。しかしこの問題に関して，そして事実に関する他の一切の諸問題について，経験をわれわれの判断の唯一の基準とすることを，（事実，わたしは君がそうすべきだと思っているのだが）君が認めるにしても，わたしは疑わないが，君が（論拠として）訴えているそのまさに同じ経験から，君がエピクロスの口に託して述べた推論を反駁することが可能かもしれないのだ。（邦訳 132：原文 107）

今回の討議は，（友愛関係を保った）二人のあいだで行われる知的遊戯である。相手側が何を考えているのか，その立場になったらどのような論理展開が可能か，「わたし」の位置を反転して行う，想像力を駆使した遊びの光景が展開されている。「あなたはこちらの視点に立って，こんな立論をした」，しかし，わたしが「あなたの立場（＝あなたが立っている私の視点）」で論理展開するとしたら，違った帰結が出てくるのかもしれない，と複数の地平で立場の交換が行われている。まさに迷宮的である。

この人称反転が迷宮的であるのは，これまでの箇所と比べてみても，語りの転回がスピーディで，追いきれない可能性があるからだ。第 1 章において，読者を知性探求に誘う書き手は，きわめて巧みな入り口を設定していた。本書の冒頭において，人称の転回は，読者が気づかないような形で行われた。読者は導かれていることを自覚せずに，特定の語りの流れに乗せられ，「わたしたち」というコンテナの中に入り込んでいた。第 11 章の人称反転は，読者がこの「わたし」の立場に入り込もうとすると，その急な変化についていけない。「わたし」という入れ物から弾き飛ばされる，いわば語りのジェットコースターのようなものである。そもそも，読者を愉しませ，深遠さが壁にならないよう気を遣う書き手が，第 11 章に

おいて，このような速度感あふれる語りをデザインしていることが，『人間知性研究』の異種混合性を表しているともいえる。人称反転のスピードがもたらすのは，「なんだかよく分からないが，とにかくすごい勢いで議論が進んでいる」という語りの疾走感であり，読者がすべてを理解するのではなく，むしろその語りのスピードを感じるのが，読みどころになっているのかもしれない[5)]。こうした「読者が理解できない（かもしれない）内容・構造・速度」を対話で展開すること，それが果たして作者の意図するものであったのかは，当該書だけでなく，ヒュームの他作品，とりわけ『自然宗教をめぐる対話』を並置して考えるべきテーマだろう。第 11 章の対話が読者の遙か先を行くように，語りの速度とその意図をめぐる考察も，『人間知性研究』のみに挑む本論稿の遙か先を走りゆくものである。

6. 結論――「わたし」という一人称の劇場

本論稿は『人間知性研究』を，「文芸上の試み」として読み解いてきた。当該書は小説そのものではないが，小説のように読むことができる。書き手としてのヒュームは，巧みに語り手としての「わたし」を創出し，読者とのやり取りを愉しんでいる。表層的に見れば，この語る「わたし」は現実のヒュームその人，そのものでありスッキリとしたものである。しかし，一歩踏み出して「わたし」の語りを精査すれば，その内実は入り組んだ迷宮であり，読者を惹きつける仕掛けがなされた「劇場」である。例えば，ある箇所での「わたし」はヒューム個人というより，日常生活の中で思索を続ける，「哲学者」一般の姿を形象化したものである。あるいは，「わたし」が挑んでいる相手，日常生活を揺るがす懐疑主義者の方が，ヒューム然としている。こうした時，「わたし」の視点は，むしろヒューム思想を訝しげに眺める「読者」の視点と一体化している。哲学探究の書としての体裁，エッセイ形式で展開される明瞭な文章記述とは裏腹に，語り手の「わたし」は複雑怪奇であり，場所によって議論の機能によって，その形

や姿，あるいは具体性／抽象度合いを変化させる。こうした複層的な「わたし」の声を生み出すのみならず，多くの読み手に対して，その複雑怪奇さを気づかせない「筆の巧みさ」こそ，文筆家ヒュームの真価と言える。

この語り手の「わたし」が，だんだんと読者の「あなたたち」を取り込んで，実質的には「わたしたち」になっていくダイナミズムも見逃せない。本書の始まりにおいて，「わたし」は日常生活の中で思索する哲学者であり，哲学を訝しむ日常世界の住人たち＝読者たちへと，境界線の向こう側から語りかけていた。二つの対立項が，筆の運びによって，気がつけば混ざり合っている。このダイナミズムは『人間知性研究』の冒頭に置かれた，「二種類の哲学」論にも見られるものである。「わたし」と対置される「あなた」，そしてこの対立項が「わたしたち」へと収斂していく様は，人称の生成のみならず，哲学者と日常を生きる人々，人々を愉快にさせる哲学と正確さを重んじる哲学，その境界の癒合へと連動している。

「わたし」と「あなた」が入れ替わる，想像上ではあるが立場の交換は，結論部の前に置かれた対話篇で顕著である。「わたし」と友人は，相互の見解を反転させた形で，古代ギリシャの世界における「エピクロス」と「アテネの聴衆」を演じる。エッセイのナラティヴから対話篇が派生していく流れ，筆者の「わたし」が（連続性をもちながらも）巧みに虚構の世界へと移り行くこと，「わたし」語りにおいて対立項が融解していく様など，第 11 章の存在は『人間知性研究』で特異なセクションでありつつ，ヒュームの文筆作法を濃縮した，全体性をもった箇所となっている。

書くことは発想を「並び替え」，異なった／隔たった知の領域を「連結する」力を持つ。『人間知性研究』で生じている出来事とは，まさにこの「書くこと」をめぐる力動であろう。この動きのモチーフは，ヒュームの認識論モデルと対応が見られる。彼の「連合」論においては，観念同士が結びついたり離れたりと，その絶えざる結合と組み換えがフォーカスされていた。一枚岩に見える「わたし」という存在ですら，この組み換え連結の中で，浮かび上がってくる生成物に他ならない。どんな哲学的主題を論

じるか（= what）と，いかに哲学を語るか・書くか（= how）は，ヒュームの知的探求において相互連動している。もっと言えば，両者はそれぞれ，一つの知的探求を構成する一側面である。このような理由で，文芸の理念と実践は『人間知性研究』を読み解くポイントとなっていくのだ。『人間知性研究』の文学的読解は，ヒュームを 18 世紀英文学へと投げ入れるのみならず，彼の哲学探究の内在構造・構成要因を再照射する契機にもなる。

『人間知性研究』は知の交差点である。懐疑論（の批判的検討）という，個別具体的なトピックを扱いつつも，行為と思索の交差，日常生活と哲学探究の交差，明晰なものと愉快なものの交差，といったような「交わりの場」が試みられている。知性の働きを分析し，その領域確定を行うことで，本書は「哲学の各論」から「哲学そのもの」の在り方を検討する，総論的／メタ的な実践へと飛翔する。哲学探究は「事象や発想の解剖」でありつつ，その語り方において「一般読者を魅了させる」ものだ，とヒュームは考える。この総論的視座によって，文芸（の理念と実践）が哲学探究のプログラムに実装される。文芸作品としての『人間知性研究』は，エッセイと対話篇が混交する，「ジャンルの交差点」として読むことができる。また，一人称の生成という点から，散文（ノンフィクション）と小説（フィクション）の潜在的接点を示しているとも言えよう。『人間本性論』のプロジェクト（= 第 4 巻・5 巻の構想）を断念した後，ヒュームは一見するとバラバラな文筆活動に入っていく。我々がその多様性を認めつつも，そこに「一貫した方針」を見出そうとする時，知の交差点たる『人間知性研究』は，我々自身の探求に出発点を提供してくれる。

Notes

1） ヒュームの機知に溢れた文章は，18 世紀から現代にいたるまで，英語圏の人々を次々と魅了してきた。18 世紀のイギリスに生きた読者にとって，ヒュームとは「オモシロく」かつ「タメになる」歴史書を生み出した，愉快で話し好きな「文の人」であった。『イングランド史』の文芸フィーバーを基底にしつつ，狭義の哲学には限定されない「ヒュームを読む経験」が，

英語圏の読者たちに共有されていったのだ。この背景については，壽里竜「哲学的精神と時代の精神」（『ヒューム読本』所収）を参照せよ。

こうした文化的コンテクストを共有しない日本において，「ヒュームの文章が愉快だ」という表現は，どこかで一般読者を戸惑わせるかもしれない。他方，「歴史家としてのヒューム」を追跡する政治思想史・社会思想史の分野では，「ヒュームの文章の面白さ」を語る研究者も，（上述の壽里竜を含め）チラホラ見られる。例えば坂本達哉は，ヒュームのテクストが持つ圧倒的な面白さについて，「文体の新鮮さ」のみならず，「300 年の時間的距離を超えて，目の前にいるヒュームと直接に対話しているような」軽快さを指摘する（16）。一般的な古典作品には，有無を言わせぬ「権威」が伴いやすいが，ヒュームのテクストは読者が「大きく首をかしげ」て異議をさしはさみ，「現代の読者同士の会話や談論」へと誘う潜性力がある（15–16）。また犬塚元は，ヒュームの対話篇を読み返す中で「思わず笑いだしてしまうこともしばしばであった」と述懐している（255–256）。日本語・日本文化を出発点とした読者でも，ヒュームの英文と思考に触れている中で，「これは愉快だ，おもしろい」と感じる契機は，常に開かれている。この可能性の地平は，我々読者が持つポテンシャリティでもあり，ヒュームのテクストが持つ開かれを示すものでもある。

2）　本稿の基本的アイディアは，三つの場を通じて育まれた。第一に，詩論の研究者である橋本良一との会話によって。とりわけ，ヒュームの『自然宗教をめぐる対話』について議論していた際，「無神論者であるヒュームが，神のごとく，複数の声を創造し，パペットのように操っているのは，ひねりがありますね」という指摘は，『人間知性研究』を論じようとジタバタしていた私に，大きなインスピレーションを与えてくれた。第二に，2022 年度の文学部英語（三田）において，多様な専攻から成る学生たちと，『人間知性研究』を読んだことによって。少数であった哲学・倫理学の学生が，正面からヒュームに挑んでくれたことによって，国文学や社会学，図書館情報学といったさまざまな学生たちと，筆者が読みの知的乱闘を繰り広げたことによって，当該書の学際的な読みが開けていった。第三に，2021 年に筆者が企画担当した「ヒューム『自然宗教をめぐる対話』新訳刊行記念ワークショップ：18 世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する」によって。コロナの社会状況下で，異なる分野のヒューミアン三人で徹底的にヒューム語りをしたことによって，フィクションをめぐる論点が構想できた。ワークショップの報告文については，以下を参照せよ。
https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/hume20210126/（最終閲覧日：2023 年 1 月 13 日）

3）　日本の英文学研究から生み出されたヒューム論として，大河内昌『美学イ

デオロギー：商業社会における想像力』（2019 年）の第 3 章～第 5 章が挙げられる。当該書は「道徳の美学化」を焦点として，18 世紀の道徳哲学と文学を通底する「中心問題」を暴き出す試みだ（3）。ここでヒューム哲学は，その「全体が美学化されたものである」と解釈され，さらに彼の虚構＝フィクション論が, 18 世紀における「リアリズム小説の勃興」を理論化・歴史化するために用いられる（58，76）。いわば，現代の文学理論・文芸批評の素材としてヒュームが読みの対象となっており，（彼の具体的な文章構成・語りの作用に注目する）本稿とはスタンスが異なるが，イギリス 18 世紀の文芸空間を横断し，さらには過去と現在の往復をやってのけるという点で，注目すべき研究成果である。また，クリステンセンやバイヤーの先行研究を参照する形で，『人間本性論』の「語り手は複数の異なった声をもって」おり，「懐疑主義者の声」や「必然論者の声」，あるいは「世俗的常識人の声」といったものが「混じり合って」現出していると指摘（あるいは部分的に言及）されているのは，きわめて重要なポイントである（91）。

4）『人間知性研究』の本文について，ブロック引用する場合は，斎藤繁雄と一ノ瀬正樹による邦訳を使用した。なお，文章表現の一貫性を保つため，表記を一部改めた。それ以外の文中引用の際は，コンテクストや文章の流れにあわせて，筆者が訳文をつくっている。

5）「そもそも，ヒュームがデザインした対話応答を，一般読者が追いきれるのか」という問い，そして，「対話の丁々発止を追いきれないところに，文の人ヒュームを考える鍵があるのではないか」という視点は，壽里竜（社会思想史）および犬塚元（政治思想史）との研究討議に多くを負っている。

Works Cited

Baier, Annette C. *A Progress of Sentiments: Reflections on Hume's* Treatise. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1991.

Christensen, Jerome. *Practicing Enlightenment: Hume and the Formation of a Literary Career*. Madison: The U of Wisconsin P, 1987.

Garrett, Don. *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*. Oxford: Oxford UP, 1997.

Harris, James A. *Hume: An Intellectual Biography*. Cambridge: Cambridge UP, 2015.

Hume, David. *An Enquiry Concerning Human Understanding*. Ed. Tom L. Beauchamp. Oxford: Clarendon P, 2000. The Clarendon Edition of the Works of David Hume.（デイヴィッド・ヒューム『人間知性研究』斎藤繁雄，一ノ瀬正樹訳　東京：法政大学出版局，2020 年普及版）

———. *A Treatise of Human Nature*. Ed. David Fate Norton and Mary J. Norton. Oxford: Clarendon P, 2007. The Clarendon Edition of the Works of David Hume.（『人間本性論　第 1 巻：知性について』木曾好能訳　東京：法政大学出版局，1995 年）

Kareem, Sarah Tindal. *Eighteenth-Century Fiction and the Reinvention of Wonder*. Oxford: Oxford UP, 2014.

Livingston, Donald W. *Philosophical Melancholy and Delirium: Hume's Pathology of Philosophy*. Chicago: The U of Chicago P, 1998.

Mee, Jon. *Conversable Worlds: Literature, Contention, and Community 1762 to 1830*. Oxford: Oxford UP, 2011.

Milnes, Tim. *The Testimony of Sense: Empiricism and the Essay from Hume to Hazlitt*. Oxford: Oxford UP, 2019.

Mossner, E. C. *The Life of David Hume*. 2nd ed. Oxford: Clarendon P, 1980.

Parker, Fred. *Scepticism and Literature: An Essay on Pope, Hume, Sterne, and Johnson*. Oxford: Oxford UP, 2003.

Phillipson, Nicholas. *David Hume: The Philosopher as Historian*. New Haven: Yale UP, 2011.

Richetti, John J. *Philosophical Writing: Locke, Berkeley, Hume*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1983.

Siskin, Clifford. *System: The Shaping of Modern Knowledge*. Cambridge, Massachusetts: The MIT P, 2016. Infrastructures Series.

Watkins, Margaret. *The Philosophical Progress of Hume's* Essays. Cambridge: Cambridge UP, 2019.

犬塚元「解説」，ヒューム『自然宗教をめぐる対話』犬塚元訳　東京：岩波文庫，2020 年，235–57 頁.

大河内昌『美学イデオロギー：商業社会における想像力』名古屋：名古屋大学出版会，2019 年.

坂本達哉『ヒューム 希望の懐疑主義：ある社会科学の誕生』東京：慶應義塾大学出版会，2011 年.

壽里竜「哲学的精神と時代の精神」，中才敏郎編『ヒューム読本』東京：法政大学出版局，2005 年，254–74 頁.